

赤谷プロジェクト近況報告

(独) 森林総合研究所による植生調査

(独) 森林総合研究所では、「針葉樹人工林を省力的かつ環境負荷の少ない方法で広葉樹林へ誘導するにはどうすればよいか」というテーマの研究が進められており、昨年からの国道17号線沿いの国有林をフィールドの一つとして様々な調査を行っています。同林分の現況は50年生スギ人工林ですが、今年度伐採予定箇所なので、人工林を伐採した後、どのような広葉樹が再生してくるのかを調査するためには適している箇所です。

調査開始にあたっては、スギと混交している樹木、伐採後に種子の供給源となる隣接する天然生林の種組成を調べるとともに、伐採前の光環境を把握しました。

林内はコナラ、クリ、カエデ類、サクラ類などの落葉広葉樹が混交し、ハリギリやケヤキなどの実生が若干みられました。隣接する天然生林はアカマツ、コナラの約80年生の二次林です。

すでに林内で生育している稚幼樹が伐採後に再生する植生の主要な部分を占めると予想できますが、土中で休眠している種子(埋土種子)も再生に重要な役割を担うと考えられています。

そこで、埋土種子を調査したり、林縁部の明るい箇所を伐採後の環境に近いと見なして樹種の生育状況を調べることにより、伐採後再生してくる広葉樹の種類を推定・検証する調査をこの春から開始しました。

この研究テーマは、人工林を可能な限り天然林に転換していこうという赤谷プロジェクトの方向に合致しており、将来的には(独)森林総合研究所ともデータの共有を図っていききたいと考えております。



調査地現況、
どんな広葉樹が再生するか？



林縁部で
広葉樹の芽生えを調査

「コリドー現地検討会2008 in 赤谷」の開催



カラマツ漸伐試験地で
天然更新の課題について討議

5月16日(金)、森林・林業技術者・研究者ネットワーク(通称「緑の回廊」)による「コリドー現地検討会2008 in 赤谷」が「森と人との共生は可能か?」をテーマに開催されました。

参加者は森林施業技術の向上に関心を持つ国有林の若手職員、森林総合研究所研究者、県職員などで、有志約60名が参集しました。

今回「赤谷の森」が現地検討会の会場に選ばれたのは、赤谷プロジェクトの目的である「生物多様性の復元」と「持続的な地域社会づくり」の両立が開催趣旨に合致したことからです。

オープニングセミナーでは、赤谷森林環境保全ふれあいセンター所長から「赤谷プロジェクトの

概要」、(財)日本自然保護協会から「自然保護から見た赤谷プロジェクト」などについて説明がありました。

その後、「赤谷の森」のカラマツ漸伐試験地や針広混交林の現地視察を、赤谷プロジェクトの自然環境モニタリング会議と植生管理ワーキング・グループの座長でもある亀山章東京農工大学教授の解説により行いました。現地では、森林の履歴の把握やその情報管理の重要性、針広混交林施業の意義などについて熱心な討議がなされました。



針広混交林施業の意義とは？